

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

社会的行動スキルの獲得に問題を抱えている要支援児には、学校生活の様々な活動で援助を周囲に適切に要請できない者が少なくない。援助要請とは、状況把握、判断、表現といった位相から捉えられている。適切に援助要請できないことは重要な課題と捉えられて、SSTなどの教育実践を通して、個人の特性にアプローチする取り組みが多くみられる。しかし、個人の特性に着眼したアプローチだけでなく、環境（周囲児や学級集団など）との相互作用に着目し実態を明らかにする必要もある。援助要請の先行研究には、悩みや問題を解決するための心理的援助に関するもの、援助要請スタイルの検討等がみられるが、対象はいずれも青年期を中心としていることが多く、児童期における研究は少ない。加えて、実際の・直接的な問題解決場面における要支援児に関する検討、学級風土や周囲児の援助提供などを包含した個人-環境レベルの検証といった視点からの研究も見当たらない。そこで、本研究は、教育心理学に依拠し、要支援児の実際の・直接的な問題解決場面における援助要請や、周囲児の援助提供に関して、要支援児の生活する環境も包含し検討している。そこに、臨床心理学・教育臨床学の視点も取り入れ検討しており先駆的な意義を有している。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究において、要支援児の援助要請や周囲児の援助提供について包括的に検討するために調査研究を展開した。質問紙調査における対象は、①小中学校の通常学級の担任教師②小学校通級指導教室の教師③小中学校の特別支援教育コーディネーターかつ通常学級の担任教師④要支援児の保護者であり、個人情報保護および研究倫理規定などを踏まえながら、質問紙調査とデータの整理・分析・考察がなされている。また、要支援児自身へのインタビュー調査においても、個人情報保護および研究倫理規定などを踏まえ、調査とデータの整理・分析・考察が行われている。

以上のように本研究は、教育心理学や臨床心理学、教育臨床学の実践研究において、量的研究として十分な水準にあり、さらに質的研究においても実証性の高い方法がとられ、当該研究分野において妥当であると考えられる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

研究において、個人情報保護・研究倫理規定を踏まえた調査の計画と実施、データの収集・統計的手法による分析、および結果の公表と社会還元は不可欠であるが、本研究ではそれらが適切になされている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、実際の・直接的な問題解決場面における要支援児の援助要請に関して、要支援児の生活する環境（周囲児の援助提供やクラスの雰囲気）も包含し検討した。

個人の要因として、援助要請の可否の割合は同数程度であることや援助要請出来ない要因とし

て困難状況の把握や援助要請の表現に困難さがあることが示された。環境の要因として、要支援児の援助要請の可否や特性、周囲児との相互関係は、周囲児が援助を提供するかどうかと関連があることが示された。加えて、クラスの雰囲気得点とも一部関連が見受けられた。このようなことから、要支援児自身における援助要請するか否かの判断と、実際の困難場面で示す姿に差異がある背景には、個人と環境の双方の要因があることを考察した。そして、個人が適切に援助要請できるように支援指導するだけでなく、援助を提供する側の影響、つまり、周囲との人間関係や児童が置かれている環境等も考慮し介入することが必要であることを考察した。以上の考察は、客観的な手続き、分析方法に基づいて導き出されたものであり、論理的にも妥当である。さらに、本研究結果は、今後、教育心理学、臨床心理学や教育臨床学の研究などの様々な分野で運用されることが期待され、十分な学術的水準に達していると評価される。

#### (5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

要支援児の実地的・直接的な問題解決場面における援助要請に関して、要支援児の生活する環境も包含し検討したところ、状況把握、判断、表現といった援助要請の位相から捉えると、状況把握に難しさがあることや、判断が出来たとしても実際の場面において個人要因や環境要因によって援助要請の表現が出来ないことがあることを明らかにした。また、個人が適切に援助要請できるように支援指導するだけでなく、援助を提供する側の影響、つまり、周囲との人間関係や児童が置かれている状況等も考慮し介入することが必要であることが示された。

これらの研究成果は、教育心理学における学習活動の際の援助要請に関する臨床心理学や教育臨床学の検討としてさらなる発展に寄与するものとして、学問的意義が高いと認められる。加えて本申請者は研究成果の一部を国際会議にてシンポジウム（4th IASSIDD Asia-Pacific Regional Congress, Bangkok, 2017）の話題提供およびポスター発表（40th Annual Conference of the International School Psychology Association, Tokyo, 2018）を行い、我が国の実地的・直接的な問題解決場面における要支援児の援助要請の現況や課題について発表したことは特筆すべき事項である。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本研究が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。